様式５

平成　26年　3月　25日

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

（　4年計画の　4年度目）

１．研究課題

（和文）現代中国文化の深層構造

（英文）Deep structure of the modern and contemporary Chinese cultures

２．研究代表者

（氏名）石川禎浩

３．研究期間

平成　22　年　4月　から　平成　26　年　3月　まで

（平成　26年　4月　から　平成　27　年　3月　までC班として一年延長）

４．研究目的（400字程度）

現代の中国文化は、芸術にしても思想にしても、その中に歴史の刻印や記憶、そして政治との軋轢を内包している。それらは、例えば文化大革命や民主化運動弾圧のように、公的に巧みに封印されてはいるが、間違いなく文化の深層を形作っている。本研究班は、こうした現代中国の文化の深層構造を、20世紀初頭から今日に到るおよそ100年を対象に、歴史学的手法によって解明しようとするものである。政治との関わりで言えば、現代中国文化は旧来のイデオロギーと如何なる摩擦を抱えているのかなどの課題の解明が目指されるであろう。また、文化活動そのもので言えば、今日の文化の多様化は、清末から民国時期の文化的カオスと類似の状況なのか、そしてそもそも中国という文明体系が近代以降の異文明との接触の中で、それへの接合をはかるということはどのような文明史的意味を持つのか、これらがすべて俎上に載せられるであろう。

５．本年度の研究実施状況（400字程度）

本年度は、共同研究員の公募を行った上で、前年度同様に、隔週開催の研究班を中心に活動を進めた。研究班への新班員加入もあったため、班員全員にたいして研究班の進め方を趣意書を配布して説明し、班の運営指針を示した。年度を通じて計16回の例会を開催、研究班員は時期によって若干の変動があったが、ほぼ40名ほどで、毎回の研究班例会の出席者は20名強であった。研究班での研究報告、討議を意味あるものにし、単なるサロン的放談に終わらせないために、研究報告者には事前に報告原稿（レジュメ）の提出を義務づけ、それを研究会開催に先立って班員に配布する体制をとった。また、それぞれの報告者の研究内容をより深め、討議を実りあるものにするために、毎回の報告にはコメンテーターをつけ、専門分野の近い研究者により多くの提言・アドバイスを求めるよう工夫した。

６．研究成果の概要（400字程度）

本年度に計16回おこなった班例会各回の報告者･報告題目は､以下の通りである:4月19日　高嶋航「近代東アジアの学校教練」、5月10日　森川裕貫「五四時期廃除考試運動考」、5月24日　柴田陽一「中国農村地域の小中学校に関する地理学的考察」、6月7日　伊丹明彦「中国国民党

情報組織：初期の思想と活動」、6月21日　吉田豊子「1945年の中ソ条約交渉とモンゴル問題」、7月5日　徐勇「民国政党政治与党軍関係」、9月27日　瀬辺啓子「新時期文学における日本・日本人像」、10月11日　巫靚「日本帝国崩壊直後の在日華僑・華人社会の解体と変容」、袁典「青島の労働運動：1929年の紡績争議を中心に」、10月25日　蒋海波「清末維新派の出版事業と日本」、11月8日　鄒双双「日本占領下の北京(1937-1945)における日本文学の翻訳」、11月22日　丸田孝志「近現代中国の暦書と通書」、12月13日　田中剛「台湾モンゴル人の誕生とその特質」、1月24日　小野寺史郎「抗戦期・内戦期国民党政権の記念日政策について」、2月7日　楊韜「戦時下移動演劇隊の実態と表象」、2月21日　白須留美「『鐵窗紅涙記』よりみる包天笑の翻訳について」、3月7日　李冬木「「袁世凱加筆民国憲法草案」について」

７．共同研究会に関連した公表実績（出版、公開シンポジウム、学会分科会、電子媒体など）

12月7日に京大時計台記念館において、人間文化研究機構との共催で、現代中国地域研究拠点連携プログラム 第6回 国際シンポジウム「人民共和国史――今どこまで解明されるのか」を開催し、共同研究会の成果の一部を発表した。また、それとあわせて12月7−8日には、本研究所で、華東師範大学中国当代史研究中心と共催で、日中共同研究「中国当代史研究ワークショップ 第２回」を開催し、研究班員の田中仁が共同研究会の成果の一端として「1980年代中共党史研究制度的重建和展開」の研究発表を行い、多数の研究班員がワークショップに出席して議論に加わった。

８．本年度の共同利用・共同研究の参加状況

区　　分	機関数	受入人数			延べ人数		
			外国人	大学院生		外国人	大学院生
学内（法人内）	6	25	10	13	227	54	79
国立大学	6	16	6	10	77	30	40
公立大学	2	3	0	0	7	0	0
私立大学	12	15	5	0	76	22	3
大学共同利用機関法人	0	0	0	0	0	0	0
独立行政法人等公的研究機関	1	1	1	0	3	3	0
民間機関	1	1	1	0	6	5	0
外国機関	1	3	3	0	11	9	3
その他	1	3	1	0	8	5	0
計	30	67	27	23	415	128	125

研究参加者の所属機関数、参加人数、延べ人数を区分に応じて記入して下さい。

※「学内」の所属機関数は「学部数」等を記入して下さい。

※参加人数及び延べ人数の算出方法は、以下の例に基づき算出して下さい。

（例）・１つの共同利用・共同研究課題で２人を共同研究員として３日間受け入れた（参加した場合）：参加人数２人、延べ人数６人

９．本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

（参加研究者がファーストオーサーであるものを対象）

論文数	28	
うち国際学術誌に掲載された論文数	（　）	9 （　5　）

※下段の（　）内には、拠点外の研究者による成果（内数）を記載。

（注）分野の特性を踏まえて、参加研究者がファーストオーサーである場合の他に、コレスポンディングオーサーである場合や指導した大学院生がファーストオーサーになっている場合など、論文における重要な役割を果たした実績を示す必要がある場合は、その役割を明示の上で論文数を記載。

役割			
論文数			
	うち国際学術誌に掲載された論文数	（　　）	（　　）

※下段の（　）内には、拠点外の研究者による成果（内数）を記載。

※　高いインパクトファクターを持つ雑誌等に掲載された場合、その雑誌名、掲載論文数、そのうち主なものを以下に記載。

※　拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す。

掲載雑誌名	掲載論文数	主なもの	
		論文名	発表者名

（注）インパクトファクターを用いることが適当ではない分野等の場合は、以下に適切な指標とその理由を記載上で、掲載雑誌名等を記載。

拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す。

インパクトファクター以外の指標とその理由		人文科学分野においてはインパクトファクターそのものの定義が困難であるが、学会誌ないし商業誌、あるいは研究単著として信頼性と多くの読者を持つことで高い評価を得ているものに限定した。	
掲載雑誌名	掲載論文数	主なもの	
		論文名	発表者名
『革命の儀礼』汲古書院	1	中国共産党根拠地の政治動員と民俗	丸田孝志
『国旗、国歌、国慶』社会科学文献出版社	1	近代中国的国族主義与国家象徴	小野寺史郎
『科学の人・孫文』勁草書房	1	思想史的考察	武上真理子
中共党史研究	1	蘇聯《国外》雑誌刊登的毛沢東略伝	石川禎浩